

地方野菜をめぐって (71)



宮崎県 ①

宮崎県総合農業試験場
副場長兼野菜部長 富永 寛

宮崎は昔「日向」と呼ばれていたように、日照時間、快晴日数は全国でもトップクラスで、平均気温も17度の穏やかな気候である。野菜の生産は副産物として、古くから都市近郊の精農家の経験技術を基に発達してきたようである。明治28年に宮崎市で傾斜地利用のキュウリ栽培を始め、36年のダイコン切り干しの生産販売、40年にキュウリ、ナス、カボチャなどの早出し栽培が始まった記録がある。しかしながら、明治30年代の県統計年鑑によると、ダイコン、ニンジン、サトイモが挙げられているくらいで、多くの野菜は自給用が中心であったと思われる。

● 日向カボチャ

日向カボチャといえば、宮崎県を代表する特産野菜として全国的に名が知られている。日向カボチャは、



日向カボチャの代表品種「宮崎早生1号」
(宮崎総合農試育成)

現在では宮崎県における日本カボチャの黒皮品種の総称であり、別名「黒皮カボチャ」とも呼ばれている。果皮は黒緑色で縦溝があり、果面にこぶがあるのが特徴である。日本料理の煮物に適し、煮くずれせず、完熟したものはきめの細かい粘質があった味が何ともいえない。今でこそ洋種カボチャに押されて生産農家も激減したが、本当にうまいものへのこだわりから、栽培の伝統は現在も宮崎市を中心に引き継がれている。この日向カボチャの来歴は、明治28年ごろに宮崎市において傾斜地利用のキュウリ栽培を行った記録があり(前述)、その当時にわずかながらカボチャが栽培されていた模様で

あると記されているが、定かではない。明治40年に徳島県から移住した人々が木框・油障子を利用して、キュウリやナス、カボチャの育苗、早出し栽培を行うようになったといわれている。当初、品種は「大ちりめん種」が主体であったようだが、大正7年ごろには「岡山新泊」が導入されている。

その後、大正10年に宮崎市大工町で半促成栽培が普及するが、この年の春に同町の妹尾新三郎氏が小型の木框を考案し、さらに翌年には蓼原広吉氏が定植床に醸熟物を用いて連結式の木框で栽培を行い、普通5月でなければ収穫できなかったものを4月上旬に収穫するという早出しを可能にし、商品価値は年を追うことに高まった。これらのことから、「この当時、従来の農業知識からいうと、これは確かに奇蹟であり、福音(喜ばしいこと)である」と記している(当時、県農務課、児玉政弘氏)。そして、大正12年に日豊線が開通すると同時に栽培も普及し、翌年には千葉県から「千葉黒皮」を導入している。

昭和2年には日向名物のカボチャを大阪に空輸し、ラジオや飛行機を使った宣伝、大阪中之島公会堂での

1 木框(かまち)...幅の広い木で苗床の周りを囲ったもの(=温床栽培)

2 醸熟物(じょうねつぶつ)...温床に用いる米糠、ワラ、堆肥などの発酵材料。

試食会を開くなど、阪神方面で大宣伝を行い、以後「日向名物の力ボチャ」として全国に知られるようになった。

当時の農事試験場（現総合農業試験場）では、千葉県の「富津黒皮」を昭和2年に導入してこの品種を元に系統選抜を行い、目的とする系統を昭和11年に「日向14号」と命名し、以後普及に移している。その後、20年には千葉県より「富津早生」、愛知県より「印喰」などいずれも黒皮品種を導入して系統選抜に着手しており、戦後の品種改良は一代雑種が主となった。時代の要請で小型化する



現在、宮崎市で行われている日向力ボチャの促成栽培（立体栽培である）の様子。
日向力ボチャの出荷時の選果の様子。

るとともに、果形・果実の光沢・収量性の改良により「育成6号」「宮崎早生1号」「宮崎早生2号」「宮崎抑制2号」などが育成された。後3者は現在も栽培が行われている。栽培型は促成、半促成の立体栽培やトンネル早熟栽培、露地抑制栽培がある。日向力ボチャの代表品種が「宮崎早生1号」であり、昭和38年に育成されたが、これは前述の「富津早生」「印喰」の選抜系統間の一代雑種である。当初はトンネル早熟栽培が中心であったが、現在は写真のような促成栽培が宮崎市で行われている。昭和初期から黄金時代を築いてき

た日向力ボチャも、洋種力ボチャにその席を譲り、現在では23ha、853t程度まで減少してきているが、いつまでも残しておきたい、故郷のおふくろの味である。

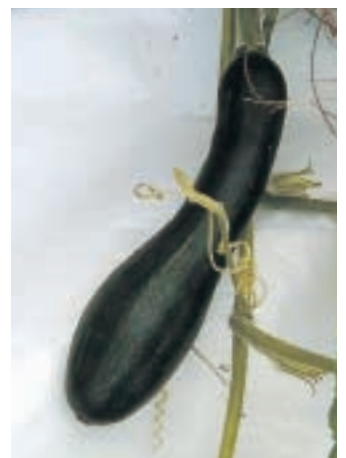


夕顔カボチャの栽培状況（西都市にて）。

● 夕顔カボチャ

日本カボチャの一種で、ヘチマに似ているところから通称「ヘチマカボチャ」と呼ばれている。

夕顔カボチャは自家用を中心に地域で栽培されており、草勢はきわめて強く、つるは四方八方に這い回るので、畜舎などの日よけ植物として



夕顔カボチャの形状は、曲がりのないヘチマ型であるが、果色は緑から黒色に近いもので、様々である（左は北方町、右は西都市で収穫されたもの）。

使われることも多かった。晩生種で短日条件にならないと花が着きにくいので、放任作りでも秋には収穫でき、最近、直売所や道の駅などで販売されている。

種子は自家採種して栽培しており、形状は基本的には曲がないヘチマ型であるが、果色は緑色から黒色に近いもので、食味も粉質から粘質のものまで様々である。



小林市の直売所で見かけた鶴首カボチャ。様々な形状がそろう。



鶴首カボチャの代表的な果形。細長く先太りで、頸部はわん曲している。



橙色がひと際鮮やかな鶴首カボチャの果肉。

● 鶴首カボチャ

日本カボチャの一種で中国からの渡来ともいわれるが、熊澤³によれば、「この品種は福岡県小郡地方^{おしご}で発見された晩生の大果種で、果実は細長く先太りとなり、頸部はわん曲し、品質がよくない」と記されている。戦時中に西日本で多く栽培され、甘藷とともに戦後の食糧難の栄養源として貢献した野菜の一種である。

小林市で見られる鶴首カボチャは自家採種した種子を使っていると思われ、写真のように鶴首状のものが

大半であるが、棒状のものも見られ、草勢は強く、晩生種で短日条件にならないと花が着きにくい。果肉は橙色、肉質は粉質で甘みもあり、洋種カボチャに劣らぬ食味をもっているのには驚かされた。種子は下部にしかないため、料理しやすく貯蔵性が高いのが特徴である。

作りやすいので家庭菜園や直売用に栽培してほしい品種である。

● 在来白皮ニガウリ

ニガウリは宮崎の方言で「ニガゴリ」や「ゴリ」とも呼ばれている。

ニガウリは東インドあたりの熱帯アジア原産といわれ、江戸時代に中国から渡来したとされるが、詳細については不明である。このことから、それほど重要な野菜としては見られていなかったことが推察される。

戦前には沖縄はもちろん、九州地域でも家庭菜園で栽培されており、宮崎においても古くから、純白ではないがわずかに薄緑を帯びた白皮種と、薄い青緑色の青皮種のニガウリがあった。しかし、大半は白皮種でその由来についての記録はない。

当初は写真に示すように25cm前後の果長で、戦後も日よけ棚に這わせ

たり、垣根作りで家庭菜園に利用され、夏の風物詩ともいうものであった。特に白皮種は苦みが強く、薄切りにしてナスとともに油で炒め、味噌と砂糖で味付けした料理は大人には焼酎の肴に、夏場の栄養源として珍重されたが、子どもにはとても食べられたものではなかった。子どもにとっては、果実は熟れると着色して裂け、緋紅色の種子を包んでいる種衣は甘いので、口に含んで種子だけを吐き出すというおやつ代わりになった。

ニガウリは棚さえあれば種子をまかなくてもよいというくらい、熟れた果実から落下した種子が春先に発芽してつるが棚に這い上がり、毎年実を着けてくれる。このように自然交雑による種子を利用していたと思われるので、当時の種子はばらつきもきわめて多かったと思われる。

宮崎郡佐土原町^{さどはら}年居地区^{としい}の齊藤助次氏によれば、昭和35年ごろになると徐々にニガウリの需要が増し、3〜4戸で露地栽培での出荷が初めて行われたという。齊藤氏は昭和41年には3aのタバコの苗床を利用して初めてハウス栽培を行い、時期外れの出荷と収量の増大を確認した。その後、年居地区では44年から本格的

なハウス栽培が行われるようになった。

品種についても、従来の白皮種を栽培している中で、昭和19年ごろ沖縄から宮崎市大字広原極楽寺に疎開してきた池間某氏の庭先のニガウリは、色は変わらないが30cm以上の長さで大きく、収量性の高い系統であったため、近隣の年居地区の菅政義氏が譲り受け、さらに早生系統の採

種に努めた。その後、この系統は宮崎の主流品種となり、長い間「白皮種でなくてはニガウリではない」という、特有の苦みを好む地元需要に添えてきた。苦みがマイルドな沖縄のゴーヤータイプが栽培の主流となる中で、この品種は現在もわずかながら栽培が行われている。ファンのためにもなくなつてほしくない品種である。

また、この系統は「佐土原」として県総合農業試験場が育種用に譲り受け、さらに系統選抜を重ね、「佐土原13」を花粉親に、「宮崎青長2-9」を種子親として、昭和57年に一代雑種「宮崎緑」を育成している。なお、「宮崎緑」はわが国のニガウリでは種苗登録第1号となった品種である。

● 在来青皮ニガウリ

宮崎では以前から白皮種が好まれ、地元消費の大半を占めていた。青皮のニガウリも栽培されていたようであるが、その由来は不明である。

県北の都農町の名前のつく「都農青」は、薄緑の果色で肩部が細る紡



自家栽培での在来白皮ニガウリ（小林市西小林）の様子（左）と収穫した果実（右）。果長は25cm前後である。



宮崎総合農試で育成した「宮崎緑」。左は種子親の「宮崎青長2-9」、右は花粉親の「佐土原13」。



錘形で、いぼ状突起もややとがったものであったが、花芽が少なく、現在ではほとんど栽培されていない。また、昭和54年ごろに、当時の川南農協の育苗センターで宮崎県内の青皮種を集めて有望系統の検討を行っており、そのうちの花芽の多い系統が「宮崎青長」であり、緑色の果色で肩部が細る長円筒形で、いぼ状突起もとがりの少ない品種であった。現在、この品種は栽培されていないが、総合農業試験場が育種用に系統選抜を繰り返して、「宮崎青長2-9」として固定した。

県内消費は白皮種でよいものの、昭和50年代に入ると、県外出荷には栄養価や機能性成分の高い緑色果実のイメージが重要な課題となり、この系統の出番が回ってきた。この系統は、前述のとおり品質が安定し、収量性の高い緑色の一代雑種「宮崎緑」の種子親として、平成3年に「宮崎こいみどり」が出現するまでニガウリの県外出荷の一翼を担ってきた。

現在では栽培されていないが、長年をかけてその地域に適応していった品種であり、見かけや収量性のみで見捨てられようとしているが、大切な育種資源として整理し、大切に保存していきたいと思っている。